

英国劇における tragic spirit の発展

石井美樹子

ヨーロッパの概念においては、ギリシア人とキリスト教を信じるヨーロッパ人のただ二つの国民が、悲劇を創造することによって、はじめて、人間の受難を壮大なスタイルの中に浄化した。ローマという媒介を通じて、この二つの芸術は融合し、いわゆる“Dark Ages”(知的暗黒時代)の中で忘れられ、そして、ルネッサンス期に、“新しい学問”として復活される。我々は、しばしば、ギリシアを英国ルネッサンスの美と芸術的香り豊さの源泉と考えるが、ギリシア・ローマにあまり多くのものを負って考えることには、イギリス個有のものまでつみとってしまう危険性がある。エリザベス朝の劇作家が、吸収し、自分のものに消化した tragic spirit は、それ自身のスタイルと、思想をもっていることを忘れてはならない。

初期キリスト教は、肉体の世界、すなわち人間界は、不可解な悪の混乱した世界であるという考えに進んでいた。ギリシア・ローマの影響を受けた初期キリスト教は、ストイシズム、ネオ・プラトニズム、グノーティシズムの三派に代表される。主観主義への傾向をもつストイシズムは、人間の tragic struggle を無効にし、人間の行動に価値をおかない。一方、ギリシア悲劇の登場人物は、自己の inner struggle でもって不幸に対決する。長い間教会と国家に精神と行動を隷属させてきた人々が、ルネッサンス期に、ギリシア・ローマの思想を受け入れたのもうなずける。ネオ・プラトニズムも主観性の性格をもっている。主観を絶対にまで拡大しようとするが、それは、実は、絶対に真なるものへのあこがれであり、彼らは、

論理的思考によってではなく、狂信とか魔法を通して、ただ自己の主観の内部でしたため、エクスタシスをもって、全てをとびこえたにすぎない。これら三つの思想の流れは、一言で云えば、個性を失って、創造主である神でさえ従っている宇宙の法則に全てをゆだねる完全なあきらめから、主観と客観の分裂を克服しようとする試みを通り、悪にひきずりまわされる人間は決して善の世界の住民にはなれないという完全な二元論へと到達する。本来キリスト教は人間に生きる希望を与え、この世での生命を尊ぶものであった。超絶的で形のない抽象的な神が肉体をともなって人々の前にあらわれた。キリストを通じて、神が人間になったことで、夫は人々にとって身近な深い関係となり、物質界と精神界がひとつに結ばれたのであった。神的なもの、人間的なものとの本質的統一がなされたこの時に二元論の克服はなされている。人間の生を何よりも尊いものとする生命力にあふれたキリスト教は、この世を否定するいろいろな思想の影響を受けて、しばしば、曲解されてきたのである。上にあげた三派は、それぞれ、中世キリスト教に微妙な影響を与えてはいるが、新しい思想の幕開きと、新しい生活の始りは、それらへの訣別から始る。

ルネッサンスと共にやってきた世俗的なものと超世俗的なものとの衝突にその端を発する *gothic tragedy* はキリスト教のヨーロッパが古典劇を効果的に模倣するずっと以前からそれ自身の中に存在していた独特の創造的バイタリティーの再生であると云っても良い。新しい思想、新しい学問の潮は12c ゴシック・ヨーロッパを襲い、現世での生命を認めようとしなかった人々も、何か内部にわきあがる力でもって、現世に新しい点、新しい秩序をうちたてるようかりたてられた。これまで人々が理解しようとしなかった現世での生きる意味を考えはじめた。この世での生活のよろこびを求め、死を考えることは、これまで禁じられていたことであったが、しかし、この世での生命の受難を認識し、死からのがれられない宿命の人間の生を問うことは、人々が、いつかは対決しなければならない問題であっ

た。現世での生活に意味を見出しながらも、死から免れることの出来ないあわれな人間の姿をながめる目は *de contemptu mundi* という侮蔑になってあらわれる。人々の心の中には人生を愛する気持と、人間の運命に侮蔑の目をむけずにはいられない衝動とが共存していた。一方では、芸術、文学において人生の中傷を楽しみ、中傷の対称である世界での生活を享樂した。Williard Farnham は、著書、*The Medieval Heritage of the Elizabethan Tragedy* の中で次の様にのべている。

One of the knottiest problems of the critic of tragedy has ever sought to solve is the paradoxical pleasure which a healthy and vitally creative people can find in a drama...⁽¹⁾

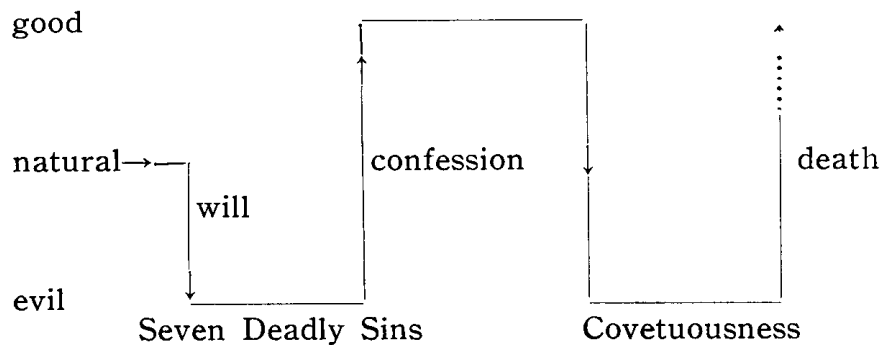
Alfred Harbage は *de contemptu mundi* を次の様に説明している。

...“*contemptus mundi* tragedy” treats the greatest thing happening to the great, and invites all men to face up to mortality.⁽²⁾

おごれる人間に、決して絶対にはなれない死すべき運命にある人間の生の真の姿、時の無常さ、世俗的栄光のむなしさを知らせるのはキリスト教の苦行の義務であった。しかも、それが、悲劇を創造するということにおいて芸術的よろこびともなりはじめた。だから、対立する二つの傾向、二つの衝動は、感情的バランスを保って、共存していた。全てが調和し統一されている所に悲劇が存在するはずがない。本来、悲劇とは二つの相対立する要素からなりたつのである。二つの対立する傾向が同じ人間に同時に存在しているということは、矛盾ではなく、ルネッサンス人の *alter ego* のあらわれなのである。*contempt of the world* は、人間の受難に目を向けることから始った。それは、17c、芸術や、科学の中に、事実、真実を見つかるようになった時終る。詩人の仕事は、この世での生命の意味を考え、生命の *spirit* を認識し、我々に与えられた言葉で、我々の受難の意味をと

らえることであるのだから， contempt of the world の発展は， 悲劇という芸術のいしずえであると云っても良い。

キリストの犠牲的死をもって， キリスト教ヨーロッパの劇は， 悲劇的可能性を持つようになった。キリストの生涯とその死が高い悲劇性を持ちながら， 同情と憐れみの念をひきおこす真の **tragedy** になりえなかったのは， キリストが復活という奇蹟によって死の受難をのりこえ， 神による勝利をとげたことによる。それは， キリストを人間から遠ざけてしまった。中世の **miracle play** の主人公も， 精神的な人間， 完全な人間でありすぎるため， 人間のヒーローにはなりえない。 **morality play** の登場をもって， はじめて， この世での人間のドラマが展開される。 **morality play** では， 人は， 己の人生において選択の自由を持ち， 個性， 人間性は選択という自由意志によって形成されてゆく。有名な *The Castle of Perseverance* の例をとりあげて， 主人公の変遷をみてみよう。



善人でも悪人でもない， ごくふつうの人間である主人公は， 自分の意志によって， 悪の世界へ墮落してゆく。が， 罪を神の前で告白することによって， 善の世界へ到達する。しかし， 又， 貧欲な心によって悪の世界へ落とされてしまう。死期の迫ったのを知って， 主人公は， 神の慈悲を乞う。そして， 主人公の魂は， 善の世界の天使によって神の国へとつれていかれることを暗示して劇は終る。 **morality play** の作者と観客は， **Justice** についての宇宙の普遍的法則は， 慈悲の力によって支配されていると考えていた。死に直面し， 自己の生と死を深くみつめ， その意義を問う のではな

く、ただ神の慈悲を乞うて死をむかえる主人公の最後は、最終的キャタストロフィーを回避し、偉大な悲劇となりえず、道德劇の範疇にとどまっている。この様な描き方は、次第に抽象的になり、劇的必要性を失ってゆく。19cになると、神への絶対服従を説く道德的なものから、この世での人間的な人間の生き方を説くものへと変り、教育的意図をもつ幕間狂言 (interlude) などを生み出す。エリザベス女王の治世における morality plays は文学形態として、その最終段階にあり、超世俗的で全く抽象的な古い精神からぬけ出し、tragedy へ向かって一步を進めた。そして、morality plays が、歴史から具体的なキャラクターを選び、取り入れた時、中世的な意味での道德劇から、現世の秩序をえがく悲劇へと、すみやかに転ずる運命にあった。世俗的因果業報をあつかって頂点に対し *Cambises* をもって、英国劇は、古い道德劇の精神を捨て、tragedy への道を歩むようになる。王の最後の言葉は、真の意味で、悲劇への開幕を暗示する。

A just reward for my misdeeds, my death doth plain declare.

Alfred Harbage は、*Shakespeare; the Tragedies* のイントロダクションの中で、これまでのべてきた *Contemptus mundi*, 世俗的因果業報を扱った *de casibus*, それに、キリストの犠牲的生涯から始まった sacrificial tragedy の三つの伝統を、英国劇の柱ともなるべき three escutcheons と名づけ、これら三つの伝統を土台にして、悲劇論を展開してゆく。「シェイクスピアと同時代の人々は、これら3つのどれか、特に *de casibus*, すなわち世俗的因果業報の劇のパターンを純粋な型で提示した。しかし、シェイクスピアの場合は、特に4大悲劇の場合、「... the escutcheons, to be properly symbolic, must be translucent and superimposed, so that in seeing one we see all.」⁽³⁾ と述べている。

一連の *The Meiror for Magistrates* に共通していることは、現世での因果業報, fortune にふりまわされる人間の姿を扱っていることなどであ

るが、終局には、本質的な悲劇の原因は、外因ではなく、登場人物の行動と性格によることを暗示しているのは注目に値する。1559年のモーブレーの作品には、すでに、シェイクスピア的悲劇の哲学の陰がみられる。中世では、悲劇をひきおこすのは、運命とか星のめぐりあわせとか、もっと一般的に云えば、神による外的力であった。もし、人が、ストイシズムを奉ずれば、自分の不幸に疑問を持ち理解しようとすることもなく不幸にあまんじることを徳と考え、ネオ・プラトニズム、グノーティシズムの心酔者であれば、より良い世界への道を知っていると信じて疑わず、キリスト教徒でないならば、希望がないと感じるにちがいない。いずれにしても、人間が支配下にある物質界は、シェイクスピアの言葉をかりれば、

The fault, dear Brutus, is not in ourselves

But in our stars that we are understanding.

(*Julius Caesar*, I. ii. 140-141)

それが、次第に、人間の個々の慎重な行動と思考に重点がおかれるようになってくる。人間の精神と現実との闘争はますますはげしくなり、人間は、宗教的社会的状態という具体的なものから、精神という抽象的なものを解放しようとし、与えられた経験の世界、現実を深くみつめはじめ。自由な論理的意志という精神にめざめ、自己の存在をより高いものと認識し、自己の行動に責任をもつようになる。新旧、様々なものが複雑に交錯していたエリザベス朝には、人々の死にもものぐるいの主体性への確立の足跡を見ることが出来る。

英国劇は、*The Spanish Tragedy*, *Tamburlaine* の登場により、バライアティと、驚くばかりの巾広さをもって、シェイクスピアと流れてゆく。*Tamburlaine* は、中世的な fortune の支配という土台にたち、*The Spanish Tragedy* は、古典劇を土台にし、主人公の心の複雑な動きを追いながら、新しい世界観の中で、主人公の性格が生み出す悲劇をくりひろげている。*Tamburlaine* の作者、クリストファー・マーローは、*Dr. Faustus*

においては、伝統的な道德劇のパターンを利用しながら、人間の心の奥の悲劇性を追求し、悲劇の深遠さをえぐり出している。新しい時代へおどり出ていこうとする精神と、古い時代をみつめる目と、いろいろな要素が入り交った世界で、人々は新しい人間像を求めていた。

シェイクスピアの *Richard II*, *King John* を通り、*Julius Cæsar* に至って、英国の tragedy は、完成された円熟期の最初のきざしを見せる。学問や本からかりてきた原理によってではなく、シェイクスピア自身の生きた経験の中でとらえられ、消化された中世又はセネカ風の伝統は、彼をさらに、4大悲劇へとおし上げてゆく。人間の受難を敬虔な気持で受け入れるばかりでなく、常に、人生に対して how, why と問い続ける姿勢であったシェイクスピアは、題材をえらび、調整することはもちろん、伝統的なドラマティック・コンテクストを、自分の考え、ヴィジョンをあらわすものへと変えていった。Williard Farnham は、「tragic art の達成は、すなわち、聖人や英雄を扱った passion play や tragedy ritual が、芸術的価値のある tragedy になるためには、人間が、人生に対する真剣な態度の中に、知的好奇心、批評能力、何が逆説で何が重要なのかを見抜く洞察力、そして、生命を破壊する力を悲劇的に模倣する創造力を持ち、創造することによるこびを見出すようになるまで待たねばならない」と云っている。彼の云う tragic art は、長い思想の変遷を経て、人々が自分の人生の担い手は自分自身であると認識し、そういう人間をみつめる経験豊かな、すぐれた創造的、批評的能力を有する劇作家が登場したとき完成されたと云えよう。

注

- (1) *The Medieval Heritage of the Elizabethan Tragedy*, Basil Blackwell, Oxford, 1856, p. 40.
- (2) *Shakespeare; the Tragedies*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J., 1964, p. 4.
- (3) *Op. cit.*, p. 9.